
星逢プラネタリウムと勇敢なヒーロー

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星逢プラネタリウムと勇敢なヒーロー

【Nコード】

N5735E

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

【七夕小説企画『星に願いを』】参加作品。天川渡は七夕の日、隣に住む幼馴染の星野姫子を七夕パーティーに誘うことにした。短冊を作るために笹を取りに竹藪に行くのだが……。――星に願いを。なら俺は、星になりたい」

1話（前書き）

七夕企画参加作品です。ほか作品は検索か、公式サイトから飛んでみてください。

今回は「会話」を重視において文章を構成しているため、そんな感じになっています。

1話

天川渡が隣の家に住む星野姫子ほしのひめこと高校受験合格祈願をするための短冊作りをしようと言い出したのは七月五日の出来事だった。

きっかけは天川の友人の日暮ひぐれだ。中学最後の夏の思い出の一つにと、誰かが海に行こうと言う前に切り出した。元々占いや祈りに護利益があると思っっている天川としては、それを断る理由も無かった。せつかくだから女子も誘おうと日暮が言い出したのをきっかけに、天川は星野に声をかけたのだった。

天川が星野を誘おうと思った理由は彼自身にも良く分かっていない。ただ、女子と聞いて思い浮かべたのが星野であっただけ。こういったパーティーはクリスマスや元旦にもあり、その度に家族ぐるみで星野家とは関わってきた。今回も当然のようにと考えたのだが、いざ家を目の前にするとしり込みしている自分がいて、天川は少なからず驚いた。

星野の家は天川の家の際にあり、二人はいわゆる幼馴染という関係にあった。だからその日、天川は普通なら迷惑になるような時間帯に彼女の家に来て、そのことを伝えようとしていた。

午後十時を回った頃、天川は目の前のインターホンを押すべきかどうか迷っていた。指先が独りでに人形劇の人形のようにびくびくとせわしく動いている。震えはしていないものの、今更どうやって彼女を誘おうか右往左往していた。

前髪をいじったりして、とにかく落ち着きが無い。最近付け始めた眼鏡がずれていないかを確認する。友人からは地味だと言われていたが、天川自身は気に入っていた眼鏡だった。

「わたる……？」

突然後ろから声がして、天川は飛び上がりそうになった。振り返ると、学校の制服姿の星野が立って怪訝な目で天川を見ていた。

「あ。ひ……ほ、星野」

「どうしたの、人の家の前で変質者みたいに」

につこりと笑う星野は学校ではかなり地味な女の子だった。陸上部に所属しているために短く切りそろえられたショートヘアーに、小さな花の髪留めが留められている。そういうスポーツマンな一面もあるが、彼女は図書委員会で、基本的に教室では本ばかり読んでいる印象が強い女子だった。そのギャップが良いというクラスメイトもいたが、天川にとってはどちらの彼女には見えなかった。星野は毒舌だ。特に天川の前では、一回り子悪魔になる節があった。どうしてもか学校ではそんな姿は見ない。媚を売っているわけじゃないのだろうし、嘘をついているわけでもない。だけれど、天川はそんな星野に空に散りばめられた星の一つを選ぶような難しさを感じていた。

「塾帰りか？」

「うん。土日の夕方からね。面倒だけど、お母さんが勉強勉強ってうるさいから」

「ああ、そういえば星野の母さんは結構厳しかったな。最近会って無いから忘れてたわ」

「そうだった？ 前に会ったのは……」

「元旦」

酒癖の悪い星野の父親が怒鳴り散らして解散したことを思い出した。それを知っていてか、星野はばつの悪そうな顔をして、そうだったねと苦し紛れに頷いた。

「じゃあ久しぶりに上がっていく？ お母さんも喜ぶと思うし」

「え、いや、もう遅いし」

「でもうちに用事あったんでしょ？」

七夕のことである。これだけ伝えれば星野家に特に用事は無かったが、星野が家に招く気まんまんでこちらを見ているので、断りづらくなった。決め手に星野の母を呼ばれて、ついに天川は断る理由を失った。

家に通され、両親に軽い挨拶を済ませた。玄関もリビングに続く

廊下も変わったところは無かった。奥のリビングには星野の弟の優希が淡いグリーンのソファに腰掛けてテレビを見ていた。中学に上がったばかりでまだ幼さの残る顔立ちだ。サッカー部に入ったと聞いたが、確かに肉付きは良くなっている。眺めていると、優希が天川に気付いてやってきた。目の前までやってきたとき、身長の高さに思わず間抜けな声を上げてしまった。

「久しぶりです、天川先輩」

中学に入ってから先輩後輩の関係になり、自然とそう呼ばれるようになっていた。

「おう、元気にしていたか？」

「ねえちゃんがうるさいですけど、なんとか」

笑って言う優希の頭に星野のげんこつが飛んだ。頭を抱えてうずくまる優希を尻目に、星野は着替えてくると言って二階に上がって行った。彼女の部屋は階段を上がった突き当たりにある。優希の部屋はその隣だ。一つ一つ確認して、少しだけ懐かしんでいた。

「ところで優希、お前って双子座だったけ？」

「はい、そうっすけど」

「良かったな。星座占いによると今年の双子座は良いことがあるぞ」

「えっ、本当すか？」

「ああ。特にが良いらしい。ふとした拍子に、なんか手に入るかも」女性向け雑誌でちらりと見た情報だったが、天川にとっては確信付いた占いだ。毎月一冊発行されるその女性向け雑誌を、少年誌をかうように楽しみにしている男子は天川だけだろう。行きつけの書店で購入しているため、レジに出す際におどしなくても良いのが彼の趣味を加速させる一つの要因にも思われた。

「実はですね、その逆で……」

優希は渋い顔をした。どうやら思い当たる節があったらしい。

「逆？」

「ちよっと待ってください」

言っと、優希はリビングに一度戻り、やけに大人びた財布を持つ

て戻ってきた。その中から二枚の券を取り出して見せた。

内容はプラネタリウムの入場チケットらしく、聞いたことが無い館の名前が記されていた。散りばめられた星のイラストが可愛らしかったが、手書きなところが所々危うさを感じさせる。それを見て、なんとなくオチが見えてしまった。

「期限切れたのか？」

しかし優希は首を横に振った。

「この『星逢^{ほしあ}いプラネタリウム』ってとこ、最近潰れたらしいんですよ。場所がちょっと営業に悪かったらしくて。せつかく買ったのに、ぼったくりですよね」

「ふうん。で、なんで二枚あんの？」

「えっ、いやその、か、家族で見に行ってもらおうかなあなんて」
「彼女でも出来たのか？」

すると優希は恥ずかしそうに顔を伏せた。凶星らしく、よどんでいた言葉すらもう出てこない。否定の言葉を口々にしているが、表情は良い意味でひきつっていた。見てみて不快ではなかったが、二つも年下の弟君に先を越されたと思うとかすかな焦りも感じた。

「こ、これ、天川先輩にあげますよ」

苦し紛れといった様子で、そのチケットを差し出してきた。

「良いのかよ。デート用だろ？」

「潰れそうなプラネタリウムのチケットなんていりませんよ」

「それを俺に押し付けるのかよ……。まあ、ただなら貰っておくよ」
「あざっす」

悪徳商人のように手をすり合わせ、優希はチケットを渡した。天川は適当にそれをポケットに突っ込んでおいた。

数分そうして話し込んでいると、二階から星野が呼ぶ声がした。きれいなソプラノの声で、一度天川は歌手になったらどうかと提案したことがあった。その時は軽く一蹴されたが、今こうして聴いてみて、再び推してみようかという気になった。

軽く手に汗握りながら彼女の部屋に入った。久しぶりに入る星野

の部屋は、どことなく女の子の雰囲気が出て、どぎまぎする。やけに少女染みた家具も、本棚に詰められた少女漫画も、ベッドの上に置かれた星型の枕も、何も変わらないのに、まるで別世界に来たような気分になる。

この違和感は何だろうと部屋の中を縫うように見渡してみるが、特に気になるところは無かった。

「そこにすわっていいよ」

天川の足元に置かれた桃色の丸い座布団を指差す。天川は言葉に甘えてそこに腰を落着けた。星野も机を挟んで向こう側の正面に座った。

「久しぶりだね、わたるがこの部屋に来るのは」

「そうだな。なんだか別世界に来た気分だ」

思ったことを正直に口に出してみた。すると星野は笑って言う。

「それはここが変わったんじゃないかって、わたるが変わったんだよ」

「なんだよそれ」

「知らないうちにサイボーグになってるかも？」

「んなわけねえだろうが。俺はどこかのヒーローかっての」

「いいじゃん、ヒーロー。かっこいいよ」

そうストレートに言ってくるので、自分のことでは無いと分かっているにも不覚にも赤面してしまった。同時に自分がそうだったらいいなという幻想をし、さらに恥ずかしくなって顔を伏せた。

天川は話題を急いで変えるために、本題を持ち出した。

「そ、そういえばもうすぐ七夕だろ。星野は何か、予定とかはあるのか？」

天川の知る限りでは、今まで七夕に行事をしたことはなかったが、一応聞いてみた。

「別に……無いかな。わたるの家で何かやるの？」

「俺というか、日暮が。パーティーみたいなやるんだってさ」

パーティーという言葉に星野は目を輝かせる。彼女がそういう盛り上がるものが好きなことを天川は知っていた。そこもまた、クラ

スメイトに言わせれば普段とのギャップらしいが。

「ていうか、七夕って明日の深夜じゃん」

「いや、パーティー自体は明後日の昼にやるらしい。日曜日だしな、明後日」

「でも短冊とか飾るんだったら明日の夜にしないと。あるの、短冊」
言われて日暮との計画を思い出してみた。しかし、その中に短冊がどうのこうのという話はなかった気がする。ひたすらに食事と飲み物の話をしていた。それと、女子を誘おうと、そればかりだった。そんな天川を見て不安になったのか、星野は少し身を乗り出して聞いた。

「え？　もしかして考えてなかったの？」

天川は多分、と口を濁して言う。

「ちよつとお、そういうのはわたるの一番好きなことでしょうが。織姫と彦星、二人が再会できたら願いが叶う、なんて今の時代わたるが信じなきゃ誰が信じるのよ」

呆れたように星野が言うものだから、天川はむっとして言った。

「星野は信じて無いのかよ」

「ええ、だって古臭いじゃん」

そう言われると天川もいてもたってもいられなくなる。占いが好きな男子なんて女々しいと言われて落ち込んだ経験がある天川にとつては、趣味を馬鹿にされるのは憤慨に値した。

「星座、なんだっけ」

かなり小さな声だったので星野は聞き取れず、「何？」と聞き返した。

「星座！　姫子の星座だよ！」

「あつ、やっと名前と呼んでくれた」

「っ……どうでもいいだろそんなこと」

揚げ足を取られたようで、天川は急にしぼんだ。星野が楽しそうにはいいいと、なだめるように言って、自分の誕生日を数えて星座を確かめる。その星座を聞いて、天川は記憶にあるもつとも信用で

きる雑誌の占いを思い出した。そして、思い出してなんとなく渋い顔をした。

「確か……恋愛運は最高だったと思う」

「おっ、本当？」

「嘘はつかねえよ。でもなあ、ほかのヤツがものすっごい低かった。こんなに差があるもんなのかと俺も初めて占いを疑ったくらい低かった」

星野はもちろん嫌そうに表情をゆがめた。

「そういうのは一番結果が良かったものを教えるもんでしょ。女子にモテないよ？」

「う、うるせえな。俺は占いだけは嘘はつかねえんだよ」

「わたるが占ったわけじゃ無いじゃん」

「それはそうだけど……」

そう言われては天川の立つ瀬はなかった。

占いに興味はあるし信じてもいるし、何よりもかなり好んではいたが、自分で占いをすることだけは断じてしなかった。一度『初めての星座占い』らしき本を買って勉強もしたが、やはり自分には無理だと判断したのだ。まず、星空を見て占うものかと思いきや、ホロスコープと呼ばれる占星術のものを使って占うと知った時点で無理だと分かった。

加えて他者の言うことは信用できても、それが自分に出来るかと聞かれると途端に黙り込んでしまうのが天川だ。一度家族に占いを試して、爆笑を食らってからめつきりだった。

それでも占いを信じて止まないのは、一つの信念とも言えた。

「ご、護利益つてのはな、信じてなきゃぜってえ来ねえんだよ」

良いことを言った、と思ったが束の間、星野は手で隠すようにあくびをして、机の上で頬杖をついた。

「どうでもいいけれど、短冊どうするの？」

放置されたことに虚しさを覚えながら、なんだかやる気もなくなつて適当に答える。

「取りに行けば良いんじゃないやね。近くに竹藪あつたら、確か」

「ああ！ 昔良く遊んだね」

そういえばそんなこともあつたな、と軽く思い出に浸りながら、竹藪のことを考える。夏とは言えど、まだ梅雨だ。地面はぬかるんでいるだろうし、出来た水たまりを罅に蚊が多いことであそこにはあまり近づきたくなかった。近日、近くにある空見山そらみさんという標高中程度の大きな山が都市開発されると聞いたことがあつたが、ついでに竹藪もマンションに変えてくれないだろうかと思う。

「明日取りに行けば……ぎりぎり間に合うか」

「それ、あたしも付いて行つていい？」

天川は星野を見た。がっちりと目が合ってしまったせいですぐに逸らしたが、どうやら星野は本気のようなだった。

「姫子が行つてどうするんだよ。重いぞ、竹つて」

「えっと、サポート役？」

首をかしげて言う様に、天川はほんのり笑つた。どうしてか、そうして笑うことが久しぶりに思えた。

「いらねえだろそんなの。むしろ危ないから止めとけつて」

「いやでも、お願い事を吊るす竹を自分で持つてきたら護利益上がりそうじゃない」

「信じないんじゃないのかよ？」

「それとこれとは別だよ」

思わず天川はため息を漏らす。これがクラスで本ばかり読んでいて、窓際の令嬢とか言われたこともある女子の言うセリフなのだろうか。

しかしその反面、そんな星野は懐かしくもあつた。昔から天真爛漫、好奇心旺盛という言葉が似合う子どもであつたことは確かだが、それでも天川の言うことにはちよろちよと列を作る蟻のように付いてきたものだ。世間からは名前のこともあり、天球が動いても、変わらず作られる星座のような二つの星だと言われていたくらいだ。押したり引いたり言い合いだったが、結局は天川が折れること

になった。その時の星野の喜びようと言えば、今すぐにもボストンバックを引っ張り出して出かけていきそうな勢いだった。

かくいう天川も悪い気はしない。むしろ、久々の星野と二人だけの外出に心躍るくらいだ。内心、遠足前の子ども以上に興奮していた。表情に出さんとする努力が必要で、多少不気味な表情になっていたのは見られなかった。

「ねえねえ、わたるはどんなお願い事を短冊に吊るすわけ？」

唐突に星野はそう切り出した。

「そうだなあ……」

将来の夢でもあれば、それが叶うようにと願ったかもしれない。しかし、天川にはまだ夢といえる夢も無い。一時期ハマっていた占いは止めてしまったし、運動が出来るわけでも無い。天文部なんて洒落た部活動もないため、結局は帰宅部だ。情性で過ごす日常に、叶えたい願い事なんてそうは簡単に見つからなかった。

「妥当に……高校合格とか？　ていうか、名目上はそのための七夕パーティなんだろうよ」

その答えに星野は不満たらたらに口を尖らせる。

「つまらないねー。そんなガリベン君じゃないでしょ、わたるは」
「て言っても、それ以外今は思いつかないな。姫子はなんかあるのか？」

星野は人差し指を立て、ふふつ、と大人っぽい笑みを見せてみる。
「当ててみて？」

そこで天川はちょっと遊んでやろうと思って、口元を吊り上げて言う。

「”お嫁さん”とかか？」

目を丸くして星野はそれを聞いたが、すぐに天川と同じような顔をして言い返した。

「わたるの？」

「ばっ……！　そ、そんなわけねえだろー！！」

「あー、赤くなってるー。あははっ、照れてるー」

「……」

もろに墓穴を掘った天川はあまりの気恥ずかしさに完全に机に顔を伏せ、腕で防御するように周りを囲った。しかし、腕の隙間から覗く耳は真つ赤で、照れているのは星野に筒抜けだった。

「あー、相変わらずわたるは面白いなー。ウブだなー」

「相変わらずっていつのことだよ」

「小学……六年くらいから？」

そうだ、確かにその辺りから主導権を握られてしまった覚えがある。プールの授業の際に、身体の発達が始まった星野を見て恥ずかしがっているのをネタにいじられたことを思い出し、天川はさらにふてくされた。

「ほれほれ、そんな暗くなるんじゃないよ」

指先で天川の肩をつんと突く。くすぐったかったのか、一瞬だけ身じろぎして、また顔を伏せる。その様子が面白くて星野は何度も繰り返して突つついていたが、天川のほうがそれに耐え切れなくなったらしく、勢い良く立ち上がった。

「よし、帰るか！」

「えっ、ちよつとお」

「明日の昼二時くらいに竹藪の前に集合な」

「う、うん、分かった。とりあえず外まで送るよ」

言って、天川と星野は家を出た。

外気の温度は室内に比べて大分低い。着替えて半袖半ズボンだった天川は軽く身を震わせ、星野も腕を片方の手でさすっている。街灯で照らされた路地の色が、一瞬曇り空に見えてまた体が冷えた。星野も同じことを思ったのか、空を見上げて言った。

「七夕の夜、晴れば良いんだけどなあ」

「晴れても天の川は見えないと思うぞ。電灯とか、結構この地域あるし。夏の大三角形くらいなら今でも見えそうだけど」

「マジでっ？ どこどこ？」

天川は空を仰いで星を探す。夏の大三角形を構成しているベガ、

アルタイル、デネブはどれも恒星の中ではかなり明るい星だから、多少光害があっても見えるはずだった。

空は星空とは言いがたいが、斑模様程度には煌びやかだった。山の上のほうにまで登ればもっと見えそうな気がしたが、その誘惑を断ち切って星を指差した。

「あの三つだな。結構見えてるから分かるだろ」

その先には、真っ暗闇の中にぽつんと取り残されたように光る星が三つ。まだまだ綺麗とは言いがたかったが、星をあまり見ない星野は存分に満足したようで、しきりに驚きの声を上げていた。

「そういえば、幼稚園の頃に織姫と彦星の劇やったよな。どう考えても名前で選ばれた、今に考えればいじめとしか思えないけど」

「ああ、そんなこともあったねえ」

「夏の大三角の星の二つは、その織姫と彦星だぜ。あの間に、見えないけど天の川があるんだ」

「今なら会えちゃうじゃん」

「まあ今が七月七日だったらな」

「少しくらいずるしちゃんばいいのにな」

それはだめだろうと言いかけたが、その二つの星を見ていると段々共感も出来た。

一度視線を空から外し、今度は恥ずかしげもなく星野のほうをみて言う。

「劇で思い出したけど、ベガって”純白”って意味なんだが、姫子にはまったく合わないよな」

すると星野も天川を見て答えた。

「あたしも思い出したけど、アルタイルって”飛ぶ鷲”っていうけど、わたるには合わないよね」

二人はしきりに笑い合い、近所のおばあさんが怒鳴るまで楽しげにしていた。

2話

天川と星野は空見山のふもとにある竹藪に来ていた。深緑の香りを鼻腔に吸い込むと、どこか都会から離れたような気分になる。季節が初夏ということもあり、やぶ蚊が多く群れを成している。日陰を求めてさまよっているのは人だけではないようだ。差し込む日差しは木漏れ日となって美しい幻想の景色を作り出している。人に嫌われるものとはいえ、日光を浴びて飛び交う様は一つの風景として形を成しているようにも見えた。

「しかし、それでも蚊は蚊だもんなあ」

天川はここに来たことを少なからず後悔していた。仲の良い星野との軽いピクニック程度に考えていたが、これでは地雷原を抜けるのと大して変わらない労力を使いそうだったからだ。足場も悪く、後ろでは先ほどから星野が何度も転んで泥だらけである。見ていて滑稽な様ではあったが、そう何度も見ていると不憫に思えて仕方が無い。

しかし星野も星野である。天川はそういう事態を想定して、作業着にも似た長袖長ズボンで着ているというのに、彼女はまさに外出用の淡い青のワンピースを着てきていた。化粧も中学生ながら多少乗っており、彼女のほうがピクニック気分だったのではないかと疑える。

「さいあくなんだけど。ああもう、また蚊に一箇所刺された」

「ご愁傷様です。O型の血つてのは、悲しい性だな」

「血液型のことはあんまり信じないけど、蚊に関してだけは納得するしかないよ」

「俺なんか虫除けスプレーすらつけてないのに一箇所も刺されて無いぞ」

「はあ……」

大きなため息とともに、星野は歩みを止めた。天川もそれに応じ

て立ち止まり、振り返った。

「疲れたか？」

「ていうか、これ歩き難い」

履いていた低いヒールの靴を脱いで、手に持ち替えた。足の裏に泥がつくのは気にしないらしい。天川はそれを見て、嘆息を漏らした。しよつてきたリュックサックから、予備の運動用スニーカーを出して星野に渡した。

「用意が良いね」

目を丸くして受け取った星野だったが、遠慮もせずに生足のままスニーカーを履く。

「姫子さ、お前一体ここに何しに来ようとしてたんだ？」

「竹取の翁のように、竹を取りに」

「どんな風にだよそれ」

悪びれた様子もなく冗談を言う星野に、昔からこんなやつだったなど、懐かしみながら笑みを返す。

それにしても、と思う。姫子の服装のそれは、明らかに外出、それも外観に気を使わなければいけないようなものだ。女子の化粧など毛の先ほども知らない天川だが、竹藪という場所にあまりにそぐわない格好には流石に違和感を覚えた。

「お前、これからどこか行くのか？」

「えっ、どうして？」

「いやだって、やけにめかしこんでるつつつの？　良く分かんないけど」

「あーうん、そうだね。ちょっと用事があるかも」

やっぱりか、とわざとらしく天川は納得する。あまり見たことの無い星野の姿に、そうせざるを得なくさせる相手に少しだけ嫉妬した。それに気付いた天川は、幼馴染だからと心の中で無理矢理頷かせる。

しばらく考えながら星野を見ていると、それに気付いた星野が大きく手を左右に振って、心なしか赤面しながら言った。

「そ、そろそろ良いんじゃない？」

天川も当初の目的を思い出したように、握っているノコギリを見た。大きすぎず小さすぎず、ちょうどいいサイズの竹を切って持ち帰ってくるのが二人の仕事だった。計画を催した友人は願い事を書く紙の用意と、ついでにパーティーでもしようということになって、その準備で忙しいらしい。

日照りに汗を流す。今頃クーラーのきいた部屋で作業をしている友人が恨めしく思えてきた。首にタオルをかけてあったため、それで軽く額を拭いた。

「やるかあ。身長より少し高いくらいが良いよな？」

しかしそれに星野は不満の声を漏らした。

「うつん、でも願い事書くんだから、やっぱり天に届くくらいが良いんじゃない？」

「現実を見るよ姫子。そんなの持って帰れるか？」

「わたるならいけるでしょ」

そいつは過信だよ、と天川は苦笑した。

星野がちょうどいい程度の高さの竹を見つけて、天川を呼ぶ。その声が妙に懐かしく感じる。

昔は公園やこの竹藪でよく遊んだものだが、中学にもなれば男女の違いに気付き始めて、自然と疎遠になっていくものだ。天川と星野の二人も例外には当てはまらなく、決して遠い存在になってしまったわけじゃないが、こうして企画を立てなければ進んで合おうともしなかった。

ノコギリを竹に立てる。技術の授業の際にノコギリの使い方は教わった。うる覚えでしかないが、切れれば良いだろ、と軽い気持ちで刃を立ててまず引いた。

「……堅いな」

「非力」

「うるせえ」

周りを見渡す。確かに竹はこれ以上無いくらいベストサイズだった。

たが、いかんせん足場が悪い。加えて近くに崖もあり、勢い余って飛び出してしまいそうだった。断崖絶壁ではなかったが、それでも落ちたらただの怪我ではすまなそうなもので、天川の肝が縮こまった。

「なあ、別のやつにしないか？　ここ、落ちそうで危ねえんだけど」とすると星野はいたずらそうに言う。

「竹が？」

「冗談言うなよ。俺が、だ」

「なら大丈夫でしょ。いくらなんでも、そんなところに落ちないって」

言われて確認したが、地面が斜面になっており、星野の言うように安心は出来なさそうだった。星野のいる位置からは見えなさそうだが、すべったら一直線で落ちていきそうな気がした。想像して、天川は身震いした。

「まじで危ねえんだけどなあ」

とは言ったが、星野が見ている手前、情け無い面は見せたくなかった。男としてのちっぽけなプライドだったかもしれない。

再びノコギリの刃を竹に立てる。作業能率は悪いが、地味ながら竹はバランスを失って行く。天川は時折吹き出た汗をタオルで拭う。放っておくとまぶたまで垂れてきて、先ほどは調子付いていたテンポを崩すはめになった。男として汗を滴らせておくのも悪くないかなとも思ったが、首筋まで落ちてきた汗を服が吸い込むことを考えると嫌になった。

作業も半ばまで来た頃、星野が声をかけてきた。

「手伝う？」

一体何をだよ、と言いかけて、天川は暇そうにこちらを眺めていた星野を思い出して仕方なく頷いた。

「とりあえず水をくれ。水筒で一杯」

「分かった」

少しだけ嬉しそうに頬を緩まして、星野は走って水筒の入ったバ

ツグを開け、家に入れてきた冷えた麦茶を持参した紙コップになみなみ注ぐ。

「おいおい、あんまり走るなよ。ここ結構滑るし、斜面がきつい……」

言葉はそこで止まった。寸隙の光景に天川の心臓が口から飛び出しそうになる。

星野が転んだ。手に持っていた紙コップを投げ出して、豪快に肩から転がるように身を倒した。

天川は地面の状況を思い出す。水辺の苔の生えたものに比べれば優しいが、斜面がある分、雑草の生い茂った地面はすべりやすい。昔、この辺りで星野やほかの友人と遊んでいた際、段ボールでソリを作って走れるほどの滑らかな斜面だ。

思考を切り替えるのに二秒もいらなかったが、行動に移すのにはもつと時間がかかった。

「いつ……」

星野がか細い声を上げたのが聞こえて、初めて天川は自分がまだノコギリを握っていたことに気付く。夏なのに雪だるまが転がってくるように星野は二転、三転しながら刻一刻と崖に向かっていった。

情景反射で天川は手を伸ばす。正面から向かってくる星野の腕を掴むのは難しくなかった。数年ぶりの彼女の肌の感触を味わう暇も無い。

引つ張られるように、天川の上体もぐらつく。

「姫っ、子！」

以前ふざけてお姫様だっこをしたことを思い出した。あれは重かった。漫画で余裕綽々でやっているが、実際はそんなものではない。天川の腕にかかる重力は、それをゆうに超えていた。

片方の腕はノコギリをしっかりと握っていたが、星野の腕に回された手の平は日の光とノコギリの柄の密着のせいでしっとりと汗ばんでいた。それが円滑油となつてすべる。

どうして洋服を掴まなかったのだ！

内心大きな叫びを上げた天川だったが、口から漏れるのは緊張という色を纏った吐息だけ。

星野の表情は垣間見れない。しかし、彼女は自らに起きたことを理解できていない。

「わ、わたる……っ！」

星野の咄嗟の判断か本能だったのか、力いっぱい爪を立てて天川の腕を引っ掻いた。痛みには顔をしかめたが、そのおかげでノコギリから手を離れた天川は、そのまま星野に飛びついて抱いた。想像よりずっと華奢な身体が腕の中にすっぽりと収まる。星野の頭を抱えるようにし、肩を地面に引っ掛けるようにして押し付け、重力をかけてなんとか失速に成功した。

倒れこんだ二人の横で、竹が折れて崖の下に落ちて行った。竹が着地する音が聞こえてきたのが予想以上に遅かったことから、天川は冷や汗を今更浮かべた。

がけつぶちに立たされたとはまさに今のことだろう。天川は内心震えながら、ゆっくりと立ち上がって顔を怒りに歪ませた。

「ば、馬鹿野郎！ 危ねえって言ったろうが！」

その有無を言わせない勢いに、星野も「ごめん」と小さくなって謝った。

「……お前もう帰れ」

星野は天川をそれこそ崖つぶちに立たされたような青い顔をして見上げて言う。

「ど、どうして？」

「危ないからに決まってるだろ。俺一人でも出来るし、姫子はこちらから出かける予定があるんだろ？ 服がそんなんじゃどうしようもないだろ。帰って着替えて来いって。まだ時間あるだろ」

「いやこれは……」

言って自分の姿を見直す。青かったワンピースは泥で真っ黒になっっており、簡単な洗濯では落ちそうなくらい汚れている。転んだせいで所々肌にも泥が張り付いており、乾いた泥が肌にひびを作って

いた。

「な。流石にその格好じゃ外歩けないだろ」

作業着だが、しっかりと着込んでいる天川のほうがよっぽど大衆の目に優しい。めかしてきたはずの自分の服装とそれを見比べて、星野は急に目頭が熱くなるのを感じた。

「あたし邪魔？」

うつむいて前髪をいじり、なんとなく気を紛らわしていたが、かすかに声は震えていた。そんなことに気付かない天川は、腰に手を当てていまだ地べたに尻をついている星野にため息混じりに言う。

「邪魔つてわけじゃないけど、いてもどうしようもないだろ」

「そうだけどさ」

「家で日暮たちの手伝いしてたほうが良かったんじゃないか？ 泥だらけになっただけじゃん」

「……そう」

星野はそれだけで、ほかに言うことはないとも言いたげな無表情で相槌を打つように返し、立ち上がった。服についた泥を軽く払っただけで、天川に背を向けた。

「帰る」

「あいよ」

「……帰る」

二度目は一字一字を区切るように言った。星野は天川の反応を確かめるためにちらりと天川のほうを見たが、彼は既に星野に興味を失ったように、ノコギリが折れていないかを確認していた。

それを見た星野は顔を真っ赤にし、吐き捨てるように叫んだ。

「手くらい貸してよね、馬鹿！！」

天川が驚いて振り向いた時には、既に星野は走り去っていた。後姿を眺めながら、所在なさに彼女のいた場所を見つめ、小さくため息を漏らした。

「昔はこんなじゃなかったはずなんだけどなあ……」

つぶやきは深緑の竹林に吸われて、誰にも届かなかった。

3話

新しく切り取ってきた中程度のサイズの笹をリビングに飾る。ガーデニングなど、景観を意識するものを趣味としていた母のコーディネートした部屋だ。笹が飾られると、それなりに風情はあった。先ほど友人六人ほどがやってきて、短冊だけ飾って帰って行った。赤や黄の色を得た笹は、花壇に咲くチューリップに対応している。一晩のみ、天川家のリビングはエレクトリックで小さなお祭り状態だった。

しかし反して外は豪雨にさらされていた。灰色の雨雲から落ちる雨粒が、叩くように窓ガラスを鳴らしている。友人の一人が吊るして行ってくれたてるてる坊主も、雨の勢いに気圧されて震えている気がした。

この分では天の川は見る事が出来ないだろうな、と天川はもの鬱げに思った。雨が降っては短冊の意味もほとんど無くなる。どうして梅雨の季節に七夕なんてあるんだろうと、変えることの出来ない天道を恨んで虚しくなった。雨雲になりそうな吐息を残して、天川は自室に戻ろうと身を翻した。

二階に上がろうと階段に差し掛かったとき、けたたましく電話の電子音が鳴った。外はすっかり日が落ちており、食事も終えた時間だ。天川は少し疎ましく思いながら、階段横の親機の受話器を取った。

「もしもし、天川です」

「あ、星野ですけど。……渡くん？」

星野の母親だった。電話越しに聞いたのが久々で、一瞬誰だか分からなかった。昨晚挨拶したので向こうは天川が分かったようだった。

「昨日はどうも……」

昨晚寄って行ったことが急に恥ずかしくなり、しおらしく返答し

た。

「ほんと、久しぶりだから驚いちゃったわ。最近姫子とは話してないの？」

「話してないっていうか、そういう機会があんまり」

「へえ……。中学三年生にもなったら、お互い恥ずかしいのかしらね」

「そ、そういうわけじゃ」

しどろもどろになりながら否定するが、受話器の向こうでくすくすと笑い声が聞こえて、天川は口を塞いだ。星野の母親らしく、人を懐柔することが得意な彼女に対して少しだけ苦手意識があった。無駄に口を開かないほうが良いと思った。

「ところで姫子がそっちにお邪魔してない？」

唐突に星野の母親はそう切り出し、天川は心臓を槍で突かれたように、ぐつと息詰まった。竹藪であまり良好的とは言えない別れ方をしたのち、星野のことは見ていない。電話もしなければ、メールの一通も送っていない。

昔から拗ねた星野をなだめるのは難儀なものだった。電話をすれば無視を決め込まれ、謝れば誠意が伝わらないと言い退け、もので釣ろうとすると卑下しているように思われて怒った。触らぬ神に祟りなしという言葉を知った中学の頃から、天川もそんな星野に構わなくなっていた。今回もそういうわけで、彼は星野を追いはしなかったし、様子を探ってもいない。

「来て無いですね。昼間に竹藪で別れたつきりです」

「竹藪で？」

「は、はい」

不自然なところで反応されたので、天川も言葉に詰まった。

「どこかで遊んでいなかったの？」

遊びと聞いて星野の服装を思い出し、少し苛立って答える。

「星野のほうがどこかに出かける予定だったらしくて、途中で帰らせました。多分、着替えに一度家に帰ってると思いますけど」

言葉のあとに数秒の沈黙と、うなるような声があった。どうやら考え込んでいる様子だったが、それも束の間だった。

「私、今日は家にずっといたから、多分姫子帰ってきて無いみたいね」

「えっ。で、でも、洋服すごい汚れてて外を出歩ける感じじゃなかったですよ」

「あー、うん。なんとなく分かってるから」

何が分かったんだろうと思いつつ、天川はそのまま受話器に耳を傾けた。

「多分外で傘も差さずにうろついてると思うから、一緒に探してくれない？」

「傘も差さずにですか？」

「そう。だから心配なのよ」

季節は初夏とは言え、梅雨だ。夜は冷え込む時間帯で、雨に当たれば簡単に風邪をこじらせるだろう。時計を見た。時計が十一の前まで来ている。女子中学生が外出していて良い時間ではない。天川もこの時間まで遊んでいたことは今までかつてまだ無い。

「心当たりとか無い？」

言われて色々場所を思い浮かべるが、どれも当てはまらない。あの格好でうろつろ出来るのは、人目が少ないところくらいだ。

「公園あたりじゃないですかね」

「じゃあ渡くんはそこをまず見てきて。私は近所を回ってみるから」
「分かりました」

天川は受話器を降ろすと、壁にかけてあったカーティガンを取って羽織った。携帯電話を持っていることを確認すると、早足で玄関に向かう。傘を取って外に出たとき、空は一面の雨雲に覆われていた。

頬に一撃を叩き込み、そんな空を吹っ飛ばすような勢いで天川は走り出した。

探し続けること数十分。流石に雨風に当てられて身体も冷えてきて、天川はだらしなくしゃみを一つした。強い雨脚は傘を激しく叩き付け、打楽器と取れなくも無いリズムを奏でている。濡れた街はほのかな雨の香りを漂わせている。吸い込んだ空気が冷たく、星野はこの冷たさに当てられていると思うと、雨脚と同じく天川の足も早くなった。

回れるところは全て回った。星野の母親からの連絡はまだ無い。つまり近所にはいなかったということだ。すると残っている場所は限られてくる。その中で最も可能性の高い場所を考える。

「空見山か……？」

厳密に言えば、そのふもとにある竹藪のことである。今日星野と行ったあの竹藪だ。距離も近くなければ天候も悪い。時間も遅いとして、あまり行きたくは無い場所だ。しかし、彼女が行きそうな場所を考えて、そこあたりしか思い浮かばなかった。

空見山は今、暗闇に包まれた空との境界線を失っている。街灯のある住宅街とは違い、空見山周辺には街灯が少ない。都市化に伴い、最近が増えてきているようだが、それも工事中の一時的なものに過ぎない。中腹辺りを開発するにおいて、恐らく一部は舗装工事くらいはされてしまうのだろう。思い入れがある場所だったので、少し寂しくもあった。

そんな風に立ち尽くしていた天川を呼ぶように、突然上着のポケットに入っていた携帯電話が振動した。急いで取り出し、緊張した面持ちで携帯電話を開いた。ディスプレイを見ると、『星野 姫子』と表示されている。ほっ、と漏らした安堵の吐息が、寒空に消えていく様を見送り、通話ボタンを押した。

「姫子か？」

「……」

電話越しに彼女の声はなく、しんと降り続くノイズのような雨音だけが聞こえてくる。

「なんとか言えよ」

「……」

だんまりを決め込むつもりなのか、やはり返事は無い。本当に電話の向こう側に星野がいるのか、天川は不安に駆られた。

「みんな心配しているんだぞ？」

「……みんな？」

ようやくあつた声は、酷く沈んでいた。どんよりと浮かぶ雨雲を見て、「お前のせいだ」と心の中で毒づいた。

「みんなって誰？」

「俺もそうだし、家族が心配するだろ」

「わたるも……？」

「もちろんだろ」

嘘は無い。星野を放っておいたことには少なくとも罪悪感があったが、今はそれよりも彼女の身の安否のほうが気持ちとして大きい。天川の口にした言葉が、あまりに真摯だったのか、久方ぶりに聞くような微笑が電話から漏れて聞こえた。

「あたし、今空見山の竹藪の中にいるんだ」

おいおい、と天川は予想が的中したことに肩をすくめた。

「それで、どうしてそんなところにいるんだ？」

「落し物探し」

「何を落としたんだよ」

「短冊」

有無を言わせないはつきりとした口調に、それがいかに大事なものであったのかを思い知らされる。

しかし、竹藪の中で短冊を落としたとは、天川も話の脈がつかめなかった。雨の中探すほどのだから、よほど大切なものなのだろうが、どうして竹藪で考えた。

「お前もしかして、今朝持ってきてたのか？」

「そう。で、転んだときに落としたっばいの」

「あの時か……」

思い出して頭を抱えなくなった。崖から転落しそうになるし、姫子は何故だか激怒するし、さんざんなイベントだった。加えて星野の短冊を落としたとなると、不幸だったの一言に限る。昨晚星野に伝えた占いを思い出して、不運に対するやり場の無い憤慨をあてつけたくなった。

「とりあえずそっちに行くから待ってる。どうせ、一緒に探して欲しくて電話したんだろ？」

何にせよ、既に天川は空見山へ向かっている。今更引き返せといわれても断ってしまいそうな心持で歩を進めている。

「……ありがとう。待ってる」

幼馴染から聞いた、久々の感謝の言葉に、自然と天川の足取りは軽くなった。

4話

竹藪の中ほどまでに到着し、星野を見つけたとき、彼女は足をくじいて泥の上にだらしなく尻をついていた。泥や雑草がこびりついたワンピースは、今朝の見る影もない。雨に濡れた髪の毛が同じく雨によつて落とされた化粧の上に乗って、雫を滴らせていた。水気を含んだ洋服が星野の女性的な身体をくつきりと浮き彫りにし、かすかに除く下着の線に、結果として天川を赤面させる羽目になった。その様子を見られて、星野に天川が笑われたのは言うまでもない。彼はそれから視線を逸らすために、自分の着ていたコートを差し出した。

懐中電灯の一つも持たずに飛び出してきた天川が、視覚的な意味合いで真つ暗なことに気付いたのはそれから数分経った後だった。星はおろか、月光すらも届いていない夜の竹藪は、一步踏み出すにも注意を払わなければならないほどの暗闇に包まれている。道中、何度か転んだ天川は、星野に馬鹿にされないように、すりむいた足の痛みをやせ我慢している。もつとも、互いの表情すら近くに寄らなければ見えないほどの暗闇なのだが。

星野を背負った天川は、背中にやらわかな、甘い感触を感じながら竹藪を搜索し始めた。首に回された腕といい、支えているふとももといい、雨に濡れて冷たいはずの肌がどうしてか熱く感じた。それは星野も同じようで、ほのかに頬を染めながら天川の背に身を委ねている。天川は傘を差しているため、自然と星野がきつく抱きしめる形になる。

「なんだか、こういうのって懐かしいよね」

内心緊張の汗で溺れてしまいそうなほどの天川に対して、母親に背負われた赤子のように落ち着いた様子で星野が言った。

「俺は恥ずかしくて堪らないけどな」

「そついうのも懐かしいんじゃない？」

「昔は恥ずかしくなかった。だ、大体お前だって恥ずかしくねえのかよ。男に背負われてるんだぜ？」

「憧れじゃん。お姫様抱っこの次くらいには」

「それも昔してやつたろ。小学二年くらいだけど」

「もう忘れちゃった」

おどけた様子で言う星野を見て、天川は笑う。今朝の別れ際の彼女の態度が気になって仕方が無かったのだが、いつもの調子の彼女を見て、安心していた。

二、三時間探したという星野の言うことを頼りに、二人はしばらくの間竹藪を歩き回った。水気を含んだ服を着ている星野と密着している成果、次第に天川の身体も冷えてきた。タオルの一つも持参しなかった自分に軽い自己嫌悪をした。時折、後頭部のほうから星野の心配する声がある。彼女は彼女で、自分の体重を気にしている様子だった。

しばらく五里霧中の道を進んでいた。すると、ふと首元にかかる星野の吐息がやけに熱を帯びていることに気付いた。雨音から意識を逸らして聞き耳を立てると、彼女の息遣いが荒いことにも気付いた。

「おい、大丈夫か？」

一度立ち止まって、首だけ後ろを向いてたずねた。

「な、何が？」

「なんか気だるそうだけど、熱でもあるんじゃないか？」

全然考えられる事態だ。これだけの間、雨風に当てられていれば体調も悪くする。星野はうつん、とうなって自らの額に手を当てた。

「……あはは、ちょっと辛いかな」

声色はおどけた様子だったが、表情は明らかに引きつっている。

天川が現れて安心したせいもあるのか、疲れがここにきて一気に襲い掛かってきたようだ。

「帰るか？」

「ヤダ」

頑固として提案を受け入れようとしな。やけに確固たる意思を持つていることに、天川は感心し、同時に首をかしげた。

「短冊なんてまた作れば良いじゃんか」

「だめ。あれと同じものなんて二度と作れない気がするもん」

「……気持ちの問題か？」

「わかってんじゃん」

星野は弱弱しく微笑した。

願い事は高校受験成功ではないだろうと思う。人生の一つの関門であつても、星野をここまで奮い立たせる要因にはなりえない。

「恋愛成就か何か？」

女子の願い事といつたらこれだろう、と思つて言つてみる。

「どうなんだろう。違つけど、そうかもしれない」

「どっちだよ」

「わたるこそどっちだよ」

「な、何？」

何故か怒気を含んでそう言い返してきた。話の脈がまったくつかめず、天川は混乱した。

「……なんでもない」

星野はそっぽを向いて黙つてしまった。その様子がまったく解せず、自分の落ち度がどこにあったのか悩んでみたが、結局見つからず、天川は肩を落とし、再び歩を進め始めた。

静かになつたことでより一層星野を強く感じるせいか、ふと昔のことを思い出す。

そもそも二人が生まれる前から、天川家と星野家は仲が良かった。加えて家も隣同士だったために、二人の出会いの逸話、なんてものは存在しない。物心ついたときには一緒だった。

そんな二人がまだ、互いを「くん」「ちゃん」をつけて呼び合つていた頃、同じ竹藪に遊びに来たことがあつた。その頃はまだ星野も可愛らしいこどもで、天川の後ろをちょこちょこついてくるような子だった。逆に天川は好奇心旺盛な男児で、いわゆる冒険の

ような気分でその時は心躍らせていた。

そんなデコボコな二人だったせいか、ふとした拍子に星野が大怪我をしてしまったことがある。転んだ際に中くらいの石に膝を打ち、子どもが見ても酷いと思える出血をした。今の星野からは考えられないような大きな泣き声を星野は上げた。水筒はおるか、ハンカチすら持つてこなかった天川はそれに異様に慌てた。

しかし、急に落ち着きを取り戻したかと思えば、突然星野を抱き上げた。そして全力疾走で下山し始めたのだ。ただの一度も止まらずにだ。

『悩んでいる暇があったら、その時間を誰かのために使った！』

それは朝に放送していた子ども向けアニメの主人公のセリフ。猪突猛进で、勇猛果敢な主人公は、彼の仲間の信じる心を糧として力を得る特殊能力を持ち、そのあまりの熱血さに、少年期の天川は憧れていた。

だから家に帰り、星野に「ヒーローみたいだった」と言われた時の嬉しさは、まだ忘れられない。今でも思い出すと、胸の奥に温かな太陽が出来たような気分になれる。

そんなことを思い出して、少しにやけていた時、星野が突然うつ、と声を漏らした。

「お、おい」

「ごめん、気持ち悪い……」

一度背から降ろし、膝を付かせる。口元を押さえる星野の顔色は最悪だった。やはり無理を言っても帰らせるべきだったんじゃないかと激しく後悔した。背負われていても、気温の低い夜の空気は確実に星野の体力を奪っていた。

ゆっくりと背中をさすつてやると、次第に星野が落ち着きを取り戻してきた。

「やっぱり帰ろうぜ。まずいつてこれ以上は」

「……じゃあどうするの」

「どうするって、短冊か？ 仕方ないだろ、新しく作ろうぜ」

すると、星野は苛立つて天川の腕を払い除けて言った。

「あたしの、あたしの一番強い願いが詰まってるの！ 信じれば護利益があるんでしょー！？ だったら、だったら……」

真っ青な顔で言う星野には異様なまでの力強さを天川は感じた。

その感極まる怒鳴りにたじろいだ。何がここまで彼女を動かすのか理解が出来ない。占いを信じる天川でさえ、この願いに対する想いの強さに心を打たれた。

「なあ姫子」

天川の中身は急速に冷え、そしてそれでいて内側はふつつと煮えたぎっていた。

「雨、降ってるけどさ、織姫と彦星は会えるんだよ」

「……まだ、晴れるかもしれない」

「そういうことじゃない。あのカップルさんはさ、宇宙っていうでつかい世界で生きてんだ。俺たちのちっさな地球が雲に包まれた程度じゃ、邪魔にもならないんだよ。星が見えないだけで、織姫と彦星は再会を果たしてる」

空を見上げる。天川たちからはその様子が見えない。けれども彼はそう信じて止まなかった。

「世界で一番宇宙に近い場所を、俺は知ってる」

ポケットの中に手を入れた。雨で湿っているかもしれないそれを握り締め、天川は傘を星野に差し出した。

「ここで待ってる。姫子の届けたい願いを、俺が探して来てやる。だから信じろ、俺が必ずそれを見つけ出せるって」

呆けた様子で星野はそれを聞いていたが、すぐに表情をほころばせて言った。

「アニメの影響受けすぎ。でも、信じてあげる」

幼馴染に信じられたヒーローは、その言葉を胸に駆け出した。

彼を信じる星野はさながら”純白”を名乗るベガのようで、彼女に信じられた天川は力強く飛翔する”鷲”を名乗るアルタイルのよ

う
だ
っ
た。

5話

夜の竹藪の空気は冷え込み、草木の臭いが充満していたはずの緑の空間には、しめった鬱っぽい臭いと暗闇が広がっている。走ることで酸素を求める肺に、無常に叩きつける黒い雨が入り込もうとして幾度か咳き込んだ。

身体が熱を求めて震えようとする。意志ではどうにも出来ないほどの寒さに歯を食いしばる。この中を星野は今までさまよっていたのだと思うと、負けてはいられない気がわいてくる。

短冊は夏祭りに持つていくような巾着袋に入っているのだという。黄色で花柄模様がついているらしい。あまり特徴的ではないと言えたが、今この場にそんなものは必要ない。何よりも懸念されるのはその防水性だ。中まで雨が浸透して、短冊が濡れてしまつては仕様がなない。何で願い事を書いたか知らないが、紙は水には勝てないのだ。

急ぎ足になったその足首に、丈の高い雑草が絡みつく。ヒーローの邪魔をする雑魚兵士の軍団のようだ。うっかり足をすべらせても立ち上がる自信はあったが、そんなものに負けてはいられない。一つ一つを蹴り飛ばすようにして、地面を踏みしめていく。

回れる場所はほとんど回っているし、闇雲に歩いては帰って来れなくなる。左を向いても右を向いても変わらない景色は、さながら運動場でランナーを蝕む変わらない視界。ゴールも見えなければ、スタート地点さえ分からなくなる。頼りになるのは自分の感覚だけ。しかしそれでもどうしてか、天川は必ず帰ってこれるという根拠のない自信があった。

天川には目指す場所があった。いくら何度も転んでいた星野とはいえ、黄色い巾着袋を落とせば天川も気付く。では、天川がそういう部分に意識を向ける暇さえなかった場面はいつだっただろうか。崖だ。彼は危うく命の危機にさらされた崖に向かって走っていた。

しかし、無論崖といつても、その広さは目を背けたくなるものがある。竹取の翁の話のように、光る竹でもあつたらならば別だったが、そんなことを期待しても何も始まらない。とにかく彼は、その場所を目指して竹藪を縫うように進んだ。

しまった、と思ったときには既に遅いことが多い。

崖にたどり着いた天川だったが、その暗闇の深さを改めて思い知らされることになった。崖上から覗いた崖下は、漆黒の海。過つて落ちたものを喰らい尽くしてしまうほどの黒。果たしてそこがどのくらい深い闇なのか目論見がつかない。

しかし天川は、

「――降りるか」

足を踏み出した。

崖というには思ったより斜面は緩く、バランスを取れば自然と降りられた。土煙が舞い、特有の渋い臭いが鼻に付く。崖に手を当てると、天川はその崖沿いに歩き始めた。

この時間、竹藪にいたのは彼ら二人だけではなかった。薄い群青色の作業着を着た男がいた。歳は四十代半ばといったところだろうか、皺の増えた顔にはところどころ貫禄がついている。手には夜食用にと買った菓子パンが入ったコンビ二袋と、暗闇を行くための必需品の懐中電灯、そして傘があつた。

彼は帰宅途中だった。つまり、彼は空見山の中腹部分に住んでいる。中腹に住宅地はもちろんないが、彼の自宅は確かにそこにあつた。今日はそこで飲み明かそうと思い、酒のつまみなるものをついでに買っていた。

道中、彼はおかしなものを見つけていた。小さいサイズの巾着袋だ。黄色かったのだろうか、今は泥と雨で汚れてしまっていて、とても綺麗には見えない。中身を見てみると、湿ってふやけた一枚の紙が入っていた。見てはまずいものなのだろうかと思ったが、この

様子では誰も探しになどこないだろうと思い、紙を取り出して見た。

「……ああそうか、今日は七夕だったな」

腕時計を見ると、まだ零時を回っていない。今この持ち主を見つけて出せば、その人の願いは叶うのだろうかと思い、それが無理なことに気付いて嘆息をついた。

彼が山の中腹で行っていた事業は、幕を閉じることになっている。築五十年の施設を壊して、新しくマンションを建設すると、建設業者に立ち退きを求められたのだ。彼は最初抵抗していたが、事業の利益のことを突かれると痛かった。売り上げは年々低下していき、今年はずいに、大赤字も脱帽するほどの収入だった。近所の駄菓子屋のほうはまだ儲けが良いのではないだろうかと思えるほどだった。確かに、同業者と比べて施設も古く、業務員も雇っていないために私企業と何ら変わらない。あんな古ぼけたところにくるくらいなら、二百円の電車賃を払ってもっと清潔で良い所に行くだろう。そう思うと、彼の気は沈むばかりだった。

七夕だったことは幸いだ。今日なら、彼の思いいれのある建物も存分に力を揮える。

そう思っ、意気込んでいた、そのときだった。

誰かとぶつかった。それが人だと分かったのは、竹藪には笹か竹しかないからだ。天川も相手も、小さな悲鳴を上げてしりもちをついた。

「す、すいません……」

まさか人がいるとは思わなかった。それは相手も同じようで、「申し訳ない」とやけに腹に響く声で謝って来た。

ぶつかったせいで落としてしまったのだろう。コンビニの袋から、菓子やらつまみやらが地面に散らばってしまっていた。やばいと思い、手を伸ばし、

「あ、これ……」

その視線の先に、巾着袋を見つけた。手にとって調べてみると、酷く汚れているが黄色い。天川は相手に詰め寄ってたずねた。

「これ、あ、あなたのものですか？」

「いや、それは途中で拾ったんだ。君のものかい？」

「はい！ あ、いや、知人のです」

「そうか。良かった、帰って捨ててしまふところだったよ」

立ち上がった男は作業着を着ていた。開発仕事を担当している業者だろうか。天川は思ったが、それにしても些か古着のようなものを思わせる汚れが所々に見当たった。何にせよ、拾ってくれた彼に頭を下げて感謝した。

「ありがとうございます。さっきからずっと探してて……」

「いやいいよ。私も偶然だったしね」

言って男は散らばった袋の中身を拾い集め始めた。それを見て、慌てて天川も手伝った。

良く見ると、男は随分と精悍な顔立ちをしている。作業着は最近始まった開発工事のものとは思えないほど解れているが、清潔に剃られた髭を見る限りでは、この周辺に住むホームレス、というわけではなさそうだ。

ふと、この人なら世界で最も宇宙に近い場所のありかを知っているんじゃないかと思いつく。風邪をこじらせた星野を長い間外の空気にさらしたくはない。しかし強情な彼女を納得させるにはそこしかない。だが、問題のその場所を、天川は知らなかったのだ。

「すいません。もしかして、工事とかで中腹に常駐してるんですか？」

遠まわしに男にそう訊いた。

「いや違う。私は中腹に住んでいてね、おんぼろのアパートだが」

「あそこにそんな場所ありましたっけ？」

「住人はほとんどいないし、人も来ないからそう思うのも無理はない」

男は自嘲して言う。天川はポケットに入っていたものを取り出し

て、そんな男に見せた。すると男は天川が何か言う前に、目を丸くしてそれを見つめた。

「この場所が知りたいんですけど、分かりませんか？」

「……」

男はまじまじとそれと天川を見比べた後、こう訊いた。

「この時間、そこは閉館してるが、何か用か？」

「開館してくれるように頼みます。意地でも今日、ここに行かなきゃならないんです」

「それはどうして？」

「七夕だから……ですかね。今日しか出来ないことがあつて、その、知人がそれを望んでいるので」

「その知人のために、君はその巾着袋を探しに来て、わざわざ頭まで下げるのか」

「しかもこの雨のせいで風邪をこじらせて、ちょっと急がないといけないんです」

口をあぐりと開けて、男はしばらく呆けた。そして天川的行為に感動したのか、天川を傘の下に入れて、コンビ二袋を手渡した。

「案内しよう。私が『星逢プラネタリウム』の管理人の暈沙木だ」

久しぶりの客に、暈沙木の顔は今までの人生の中で、一番を争えるほど緩んでいた。

最終話

午前零時を回り、一向は星逢プラネタリウムの到着した。天川は一度星野の親に彼女が無事なことを連絡し、熱にうなされる彼女を近くの椅子に座らせて安静にさせた。

暈沙木はすぐにタオルと毛布を持ってきて、そのあとに「待つてろ」だけ言い残してその場を後にしている。天川は星野の身体を可能な限り拭いてやり、濡れた服の裏にタオルを忍び込ませた。これで少しは寒くなくなっただろうと、ほっと一息ついた。

星逢プラネタリウムの中は大分質素なものだった。プラネタリウム以外には受付フロアと、トイレが二つあるくらいで、加えて年季の入った座席がまた人を寄せ付けなさそうな雰囲気をかもしだしている。中央に置かれた投射機だけが、やけにプラネタリウムらしい丸く球状になっている天井は、まさにそのものだが、ここが外観上ドームでなければそれも分からなかったかもしれない。

六十ほどしかないだろう座席の入り口付近のものに二人は座っている。天川は星野の隣に座って、首を倒してぼーっと天井を眺めた。電気がついていないので、その有様は垣間見ることが出来ない。ただ延々と広がる夜空のような暗さに、意識を吸い込まれていた。

暈沙木が始めたこのプラネタリウムは、創業してからこのかた、この全席が埋まったことは一度も無かった。都市部から見てドーナツ現象の最中にある市内では、プラネタリウムなど電車ですぐだ。加えてもとも暈沙木の趣味のようなもので、たまたま資産が出来たために作ったのであって公共施設ではなかった。それでもチラシ配りや口コミで広げようとしたのだが、結局はこんな山奥に来るのは数人のはずれものだけだった。副業で金銭を稼ぎつつ、ここまで来たのだが、ついにその寿命も途切れようとしている。

天川が見上げている空を一体どれだけの人数が眺めただろうか。子連れの親子が二組来ればそれだけで暈沙木は喜んで飛び上がり、

老人夫婦が一組来れば過剰とも言えるもてなしをした。そんなサービス精神旺盛な彼の経営するところが、それでも黒字を出さないのは地形にある。山奥ともなれば、プラネタリウムなど無くとも星は見えるのだ。彼の夜空を眺めるより、本物の夜空のほうが良いに決まっていた。

しかし、それでも天川はここで良かったと思う。すべては縁だったのだ。天川が星野の弟からこのチケットを譲り受けたことから、星逢プラネタリウムが、天川と星野の遊び場であった空見山に創業されたことまで。

「あ、そうだ。姫子、これ」

そして最大の縁だった、星野の願いが詰まった巾着袋を彼女に返した。瞼を半開きにしていた星野は、飛び起きるように身を起こしてそれを受け取って顔を輝かせた。

「本当に見つけてきてくれたんだ！」

あまりにも嬉しそうにするので、天川もなんだか頑張った甲斐があったなと、つられて嬉しくなる。

「俺じゃなくて、量沙木さんが見つけてくれたんだけどな」

「それでもいいよ。ありがとう、ほんと、ありがとう」

素直に感謝の言葉を口にされて、天川のほうが照れてしまう。頬をかいて、今にも触れそうなほど近づいてきた星野から目を逸らした。

「なんていうかさ、やっぱあるよな、信じる力ってやつ。姫子が待っていてくれたから、頑張れた、みたいなの」

「あたしの念力のおかげ？」

「というより、俺の心構え的なもの」

いつもの星野節を軽くスルーされたせいか、星野は頬を膨らませた。だが、天川のなんだか大人びた顔を見たら、そういうものが途端にどうでもよくなったように、彼の顔を優しく見つめた。

「――星に願いを。なら俺は、星になりたい」

天井を見上げているはずの天川の目は、もっと遠くを見ている。

星野はそんな天川の邪魔をしないように、言葉を返さなかった。

「結局は星も、願われたら叶えたくなると思うんだ。今日の俺みたいにさ、誰かに信じられたら、どうにかして叶えてやりたくなくなるじゃん。期待を裏切りたくないし、そうやって信じてくれたものをおざなりになんかしたくない。きっと星になれば、どんな奇跡だって起こせるような気がする」

「わたるは、誰かの願いを叶えてあげたいの？」

天川はそれにうなづいて、ふと答えを見つけたように言った。

「いや……ただ、信じられただけなのかもしれないな。普段ヘタレだからさ俺。信じられたら気持ちいいのかもしれない」

その時だった。

鈍く響くような音とともに、天川と星野の目の先に、宇宙が広がった。

満天の星空。昨日見たまばらなものとは違う、驚づかみ出来そうな煌きの軍勢。視界の端まで広がる光景に、思わず声を漏らすことも出来なかった。二人の瞳にはその星空が丸ごと映っている。身体がその中に飲み込まれたように動けなくなる。天川が宇宙に最も近いと言った場所は、星の海へと姿を変えていた。

その中でも、一際輝きが群れを成している部分があつた。世界で最も長い川、天の川だった。その中に天川はアルタイルとベガを見つける。ちょうどその帯になっている部分を境に、その星はあつた。天川は天に手を掲げ、人差し指でその間に橋を作った。そうして、織姫と彦星が抱き合う姿を幻想した。

「会えた気がする」

光景に吞まれていた星野が小さく声を上げた。その手には巾着袋がしっかりと握られている。彼女の想いが詰まったそれを、天川と同じように掲げる。

「願いを叶えてくれる『天川渡』^{アルタイル}の本当の姿に」

星空の中でも一際強く輝く彼は、まるでヒーローのような力強さを持っていた。

「ねえ、わたる」

「ん？」

「あたしの願い、もしかしたら叶ったかもしれない」

「まじ？　すげえな七夕」

「七夕が凄いの？　これって」

「半分くらいは俺も凄いいんじゃないかと思ってるけど」

「じゃあもう半分はあたしじゃない？」

「それじゃあ七夕凄くねえじゃん」

「それもそうだね、と星野は小さく笑った。

その笑みが彼女にとっての願いで、それに天川が気付くことはない。しかし、それでもいいと星野は思った。きっとそれも一つの形なのだろうと。

そうしてしばらくしていると、暈沙木が二人のところまでやってきた。彼はとても満足そうな表情で、自分の星空を見上げた。

「まさにこの『星逢プラネタリウム』の最後に相応しい星空だよ」
まるで息子の巣立ちを見送るような目をしていた。この場所から去っていくのは彼だというのに。

「七夕の日に願った願いが叶うと、その願いは永遠に消えることがないと知ってるか？」

「そんなものありましたっけ？」

そういった願い事に詳しい天川は彼のほうを向いて首をかしげた。星野は星野で、嬉しそうにしているものの、複雑そうな表情で同じように視線を向けた。

「もちろんだ。ちなみに、うちのプラネタリウム限定の伝説だがな」

「それじゃあダメじゃないですか」

「信じればそうなるかもしれないぞ？」

口元を吊り上げて言われて、天川と星野は今まで二人がしていた会話を聞かれていたことに気付いて真っ赤になった。それを見て、暈沙木は豪快に笑い飛ばした、

そこで、天川は暈沙木が手に本を持っていることに暗闇の中で気

付いた。

「それ……なんかぶっそうな表紙ですね」

すると暈沙木も本を胸の前に持つてきて、「ああ、これか」と自分でも気付いたように言った。

「実は副業で占い師をやっていてね、今年の占いの結果が載っているんだが、よければ君たちの星座を教えてくださいか」

天川と星野は顔を見合わせて、頷いた。

「えっと、あたしはおとめ座で」

まずは星野が占ってもらったことにした。彼女は昨晚も天川にそういう類のものを聞かされたので、気持ち半分だったため、しぶしぶといった感じだった。

暈沙木が手際よくページを開き、結果を口にした。

「ああ、おとめ座は正直今年の運勢はよろしくない。突然病気になるか、大きな怪我をするかもしれない。しかし安心するといい。それでも、おとめ座は恋愛運においては全星座中一位だ。行動せずとも、おのずと運が向いてくるだろう。もしかしたら突然の病気とは、恋の病、ということかもしれないな」

歳の割に合わないセリフを言い残したせいか、星野は苦笑いして礼を言った。反して暈沙木は自信満々に胸を張って、次の天川を急かした。

「自分は、双子座です」

再び暈沙木はページをぺらぺらとめくった。天川は内心ドキドキしながら、その結果を待った。

「おお、双子座は最高だ。金運、恋愛運、健康、生活、すべてにおいて良いぞ。何も言うこと無しだが、特に物運が中でも飛びぬいて良い。ふとした拍子に手に入れたものが、素晴らしい結果に繋がるかもしれない」

「じゃあきつと、このプラネタリウムのチケットですね」

「ははっ、間違いないな」

今は雨でふやけてしまった、手製のチケットをポケットから出す。

星野の弟からもらったチケットが、まさかこんなところで役に立つとは思ってもよらなかった。普段から女性雑誌を読んで占を見ていた天川は、今年の自分の運勢が良いことを知っていて、あえて廃業寸前のプラネタリウムのチケットをもらったのだ。

そこで、天川は「あれ？」と思う。占は普通、占い師によって結果は様々な場合が多いのだが……。

「まあいつか」

とりあえず天川は、目の前の光景を楽しむことにした。七夕の雨の日に見る、最高の星空を。

最終話（後書き）

どうも、蜻蛉です。

今回は七夕小説企画ということでしたが、どうだったでしょうか。なんだか少し、星の話なのか悩めるところではありますが、すれすれセーフなんじゃないかと自己擁護しておりますのは秘密です。

今回は前書きにあるとおり会話を重点において、いわゆる「ジョーク」的な会話を目指して書いてたんですが……なんか微妙でしたね。というか、会話を多く取ったつもりなのに、無駄に三人称にしてみましたせいでちょっと硬くなったかもしれません。

まあ何にせよ、企画楽しかったです。テーマはきつと「信じること」みたいな感じです。俺も星に願い事とかしてみてー。東京の空はとっても星が見えません。流星群を家族と見に行ったことが懐かしいです……。

それでは、よければ評価感想等をくれれば嬉しいです。読了お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5735e/>

星逢プラネタリウムと勇敢なヒーロー

2010年10月8日15時46分発行